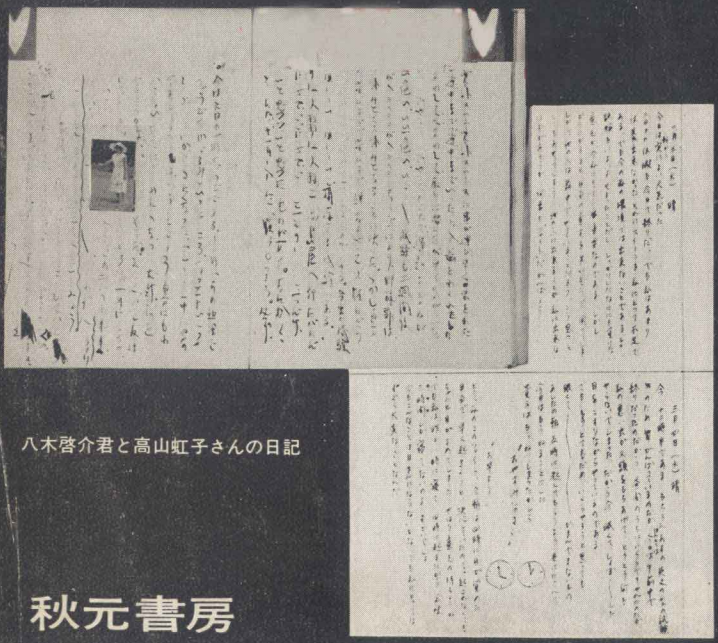
虹子と啓介の交換日記

玉村美和子

虹子と啓介の

交換日記

裏から見た男女高校生の記録



八木啓介君と高山虹子さんの日記

秋元書房

虹子と啓介の
交換日記 —裏から見た男女高校生の記録—　定価 200円

昭和37年6月25日　印刷
昭和37年6月30日　発行

編　者　玉井美知子

発行者　秋元英子
東京都新宿区赤城下町42番地

発行所　株式会社 秋元書房
東京都新宿区赤城下町42番地
電話 (341) 0758
振替東京 27047

乱丁・落丁のものは本社または，お買いもとめの書店にてお取りかえします。

組版・西田整版　印刷・錦昌堂　製本・共成社
© 1962 Printed in Japan

目次

I　高校一年時代（自一月十日　至三月二十五日）……7

誰かと誰かが……7
大人はわかってくれない……11
さぼる……22
Xからの手紙……24
秋葉君のことから……26
九回の裏……30

II　高校二年時代（自四月八日　至三月十八日）……34

クラスがえ……34
伊豆半島一泊旅行……36
グループの交際なんかいらない……46
意　地……50

悪いあそび……55
中間試験……60
母と娘……67
カンニング事件……70
青春にかける……73
夏休み……81
親友とは何だ……86
運動会で……91
ただいまあれもよう……93
進学と就職の屈折点……103
友情ではなかった……110
悪への誘惑……114

Ⅲ 高校三年時代（自三月二十日 至一月三十一日）……123

アルバイトでかせごう……123
修学旅行は九州で……127
僕の心は二枚の絵……132

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

若き日のつまずき……136
スリルがほしい……140
キャンプ生活……144
負　数……152
お祝の背広……156

Ⅳ

それからの二人……玉井美知子 160

虹子と啓介の

交換日記

―裏から見た男女高校生の記録―

日記が交換されたいきさつ

今から三年前のことです。横浜の県立高校の一年生に八木啓介君という一生徒がいました。八木君は、クラスメートの高山虹子さんと交際したいと思ったのです。そこで八木君は友人を通して虹子さんに申し入れ、二人で日記を交換することを約束しました。つまり一冊の日記帳に虹子さんがまず書いたら、今度は啓介君に渡し、啓介君がまたそれに書くというやり方です。

二人の日記帳は、このようにして今日は啓介君、明日は虹子さんと下駄箱を通したりして交換されるようになりました。

I　高校一年時代（自一月十日　至三月二十五日）

誰かと誰かが

一月十日（土）　晴　　虹子

八木君と、二人で今日から日記をつけることにした。私は今までに何度かつけたが、いつも途中でやめてしまった。が今度一人だけで書くのではないから大丈夫だ。

八木君のことで私はよくわからないことが沢山ある。なんでも書いて、意見を書きあうのって、とても楽しみな気持。

「八木君が君と友達になりたいって言っているよ」って秋葉君が私のところへ来たとき、面白半分にいいわよ、なんて言ってしまった。そうしたら秋葉君が今日の四時に「山」に来てくれって言って消えちゃったときは、どきんとした。どうして喫茶店になんかに呼び出すのかしら、話したければ学校でも出来るじゃないの、って思ったから……。

「山」は普通のコーヒーやだから安心した。

秋葉君って教室でもピエロみたいだけど、いい人ね、「今日ここで二人は友達として結ばれます」なんて真面目くさって、コーヒーで乾杯したでしょ。ほんとにおせっかいやだけどいい人だ。急に友達になるっていうことを取り上げて考えてみると、教室へ行ったらどうしていいのか困っちゃう。今まで普通だったのに特別に気になり出しそうで、きゅうくつな気もするの、本当のこと言って。それだけに、玉井先生の日記の話から八木君が考え出した二人の往復交換日記はとてもすばらしい。八木君は今ごろなにを一生けんめい書いているかしら。

一月十一日（日）　晴　　虹子

久しぶりに寝坊した。起きたのは十一時。昨日の英語の試験で二つ間違ったので百点がとれず、くやしい。間違いを追求したのは、高校に入って今日が初めてだろう。八木君が一生けんめい勉強しようね、と言ってくれたからかしら。三学期は少しがんばって、どんなことがあっても学年五十番以内を取らなければだめだ。

こたつに入って新聞をゆっくり読み、オルゴールを聞いていたら、お父さんに、「お前はのんびりして、いい身分だね」と皮肉を言われちゃったわ。どうして女の子

っていうのはゆっくり読書したり、ぼーっとしていたりすると何か言われるのかしら。いつでもけしかけるように何かやれ、と言わんばかりに言うのかしら。まったくぶが合わない。そういう点男の子の八木君はどうかな？まあとにかく母の手伝いをすることにした。

「今年は家の手伝をよくして良い子になろう」とみんなの前で言った手前（ＨＲの時のことよ、忘れたかしら）実行しなくてはね。

少し勉強しようと思っていたら君ちゃんが来たので、ベチャベチャと一時間くらい立ち話をしてしまった。この頃は母もあきれて何も言わない。井戸端会議の委員長みたいだって？　仕方ないわ、女性は話すことすきよ、そして友達と同情し合ったり、いい知恵を借りたりするの。とうとう私は八木君のこと話してしまった。だって君ちゃんの家に電話があるので、私への電話連絡には仲良しの君ちゃんに頼むのが一番いいと考えたから。悪かったらごめんなさい。大丈夫、何でも秘密を守ってくれるから。

明日、日記帳を交換するのだが、うまくいきますように。

一月十二日（月）　晴　　啓介

今朝の寒さは特別だ。平年より一・六度も低いそうである。ところで今朝いつものように秋葉の家へ迎えに行ったんだ。するとおばさんが「二、三日豆腐屋の手伝いをさせるから学校を休ませますよ」ってすごい太っちょの顔で僕に言うんだ。秋葉は両親がいなくてこの家へ孤児院から幼い頃もらわれてきているんだよ（皆には内緒だぜ）、だからおばさんの言う通りしなければならないんだ。僕が帰りかけようとしたら秋葉が真赤なふくれた手をして、長靴をはいて、ゴムの前掛けをかけて出てきたんだ。いつものニコニコした彼の顔をみたら言葉が出なくなってしまった。

「おれ、高校を卒業させてくれるっておばさんが言ってたけれど、豆腐屋がいそがしくて、働く小僧さんがいなくなったので配達もしているんだ、だから勉強する暇がないんだよ、三学期も今の調子なら落第するかもしれないって玉井先生におばが言われちゃったし、だから学校やめて働くことにするつもりだよ」って言うわけさ。

僕は何とか秋葉のこと助けてやりたいと思ったが、どうにもならない。あと数日で彼は退学するんだ。淋しい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

な。

放課後、練習をしたが昨日休んだせいか調子が悪かった。帰りは腹がすいたので沢田と満腹軒でラーメンをたべて別れた。電車の中で、交換した日記を読んだ。なかなか面白いことが書いてあったので、虹子さんの様子を思いうかべながら横須賀線にゆれていた。ところですこし気になることがある。君塚さんにどうして何でもしゃべっちゃうのかな。そういうことから、めんどうくさいことが起きなければいいと思うが、どうだろう。虹子さんが女性なのに失礼かもしれないが、女のおしゃべりはいいことはないから。ごめんね、怒らないでください。電話の件はたしかに君塚さんの家が一番つごうがいいだろう。まあ、程々にして僕たちの世界は守っていこうよ。

一月十三日（火）　雨　　虹子

冷たい雨。教室の冷蔵庫のような寒さと暗さの中で勉強しろと言ったって無理。とても字なんてみえない。あんまり冷たいのでつい雑談したくなったり、笑い出したくなったりするものらしい。社会の時間、国語の時間とゲラゲラさわいじゃって、先生をおこらせた。じっとしていれば眠くなるわね。佐賀先生ったち、雨が降ると浮かれる猫みたいだ、お前たちは猫族だなーって言ったでしょ。佐賀先生こそ猫がメガネかけたみたいだわ、って君ちゃんとまた笑っちゃったの。

秋葉君のこと読んで、シューンとした。私達のことを結びつけてくれた恩人でしょ。あの時の彼、ぜんぜん、朗らかなんで少しもわからなかったわ。みんなでスタディールームの時間に助けてあげても駄目なのかしら。明日のテストはお互いにガンバリましょう。お休みなさい。

一月十四日（水）　晴　　啓介

二人の交際のことについて玉井先生の所へ話に行ったときのことを書くことにする。

僕は虹子さんにこの話を相談してから行こうと思っていたんだけれど、秋葉が来て玉井先生の所へ退学届を持っていくからいっしょに来てくれって言うので、そのついでと言ったら変だけど二人のことを話したくなっちゃったので許してくれ。

秋葉は先生に、「僕、豆腐屋の仕事をする決心しました。だけど、みんなと面と向って別れるのはとても苦し

いので、だまっていて下さい」っていつも笑顔を忘れたことのないのに青い顔して言った。

先生も「家の事情でどうしても勉強の時間が出来ないのだと、数学と英語と国語とひっかかってしまうから、残念だけど、秋葉君の選んだ道も将来のためには良い結果になっているかもしれないわね。HRの時には教室にいらっしゃい。その時だけでもみんなと話し合えるといいわ。仲のよい友達にはHRの話を伝えてもらって、いっしょに考えていきましょう」って言うじゃないか。僕感激しちゃった。

僕も興奮して、「高山さんと交際してみたいと思います、二人で勉強をして、成績もしっかりと上げていきたいのです。困った時には先生に相談します」って言ってしまった。

先生は、「なるべくならみんなで交際した方がいいのよ。八木君は溺れ易い性格だから逆に夢中になって勉強にブレーキをかけるようでは困るんだけれども、どう大丈夫かしら」

そこで僕は、「高山さんのような立派な女性と親しくしてもらうことは、僕の毎日のはげみになりますから絶対に大丈夫です。責任のある行動をとります」と言い切ってしまった。こんなわけで玉井先生には承認してもらった。おわかり？

午後から生徒会の役員改選の演説会を開いたが、演説するものも応援演説をするものもどうもうまくいかない。それに聞いている方もヤジが多くて、あれなら雑音だ。会長候補の杉山の話は、自分が会長になったら、全生徒のためになることをします、とか何とか言っていたけれど、どうなるもんか。

放課後の練習は明日が休みなので大いにしぼられた。これからもっときつくなるそうだ。野球部の副部長が僕を呼び出して注意した。ここに書くけれども気にしないで。

「練習に熱が入っていないのは女の子とつき合うからだ」とイヤミを言う。他人のことに対してよけいなことだと思った。三年の中島さんもいやな存在だ。ちびのくせに生意気なんだ。「女の子にいちゃついて、エラーばかりしてたんではね……」こんなこと言われてもだまってひっこんでいる新米のつらさよ。先輩かぜをふかせていやんなっちゃう。

彼らと急いでわかれて、結局、虹子さんの帰りに間に合ったわけだ。虹子さんの家は、学校からずいぶん近い

な。歩いて行けるのがうらやましい。僕は一時間十分はかかる。

明日は必ず虹子さんの家へ遊びに行くって約束した。遊びにいくのはこれが最初だが家の人たちに恥かしくないように、お行儀よくしたいな。うまくいきますように。

明日は年賀ハガキの抽選発表だ。

明日が待ち遠しい。とても心配な気もする。もう十二時だ、寝ようかな。

大人はわかってくれない

一月十五日（木）晴　　虹子

今日は八木君と家で遊ぶことになっている、と思うと体じゅうが元気でいっぱいになったような気持がする。寝坊しないで八時に起きた。掃除もすませ、お母さんのお手伝を出来るだけやった。なにをして遊ぼうかと考えていたら、まずいことに東京のおばさんとおじさんと妙子ちゃんが、お正月にうかがえなかったから、といってたずねてきた。家は普段でも小さくて、家族がぎっしりつまっているので、この上、大きい人が三人も来たのではたまらない。これでは八木君にせっかく来てもらっても入る部屋もないので、突然で悪いけれども家へ来ても駄目だということを、日吉のお兄さんの家へ電話をした。

しかし、逗子の家に帰っていて、八木君はいなかった。お母さんが「逗子に帰ったんでは来ないでしょ」と言った。私も逗子からここまで来るのは大変だから来ないかもしれないと思っていた。けれども八木君はちゃんと時間にやって来た。私はとても感激しちゃった。だって、約束と時間を守るんですもの。とても気持がいい。

そのまますぐに二人で映画に行った。「鉄道員」と「私の可愛い人」を見た。私は見たいと思っていたので、とてもよかったけれど、八木君は眠っていて、つまらなかったのね、悪いことを

してしまったわ。これからは、あまり映画を見るのはよそうと思う。それに、もし野球部の二年生に会ったら、この間のこともあるし、迷惑をかけると悪いと思って心配した。でも今日はさいわい会わなかったのでよかった。

家に帰ったのが七時、東京のおばさん達は帰っていた。

玄関を入ると、お母さんが変な顔をして、「お帰り」と言った。おや、なにかあるな、と第六感でピーンときたが、そのまま自分の部屋（といっても姉さんといっしょの六畳のこと）に入ってオーバーをぬぐと、お父さんが呼んでいるから、とお母さんが言うので、お父さんのいる長火鉢の前に座った。

「虹子、今ごろまでどこへ行っていたんだ」

「映画よ、東宝に行ったのよ、八木君と」

「お父さんはね、おまえが男の友達とつき合ってはいけないとは言っていない。しかし、まだ学生だよ。あくまでも学生の本分を忘れちゃいけない。あまりお調子にのらないようにしなさい。今日だってお客さんが来ているのに手伝いもしないで、朝から出かけてしまう。昨日、八木という男と会っているっていうじゃないか。お母さんが、玄関の前で長話をしていたって言ってたぞ。そんなに話をしたのに、まだ話すことがあるのか、あんまりそんなことに夢中になって、勉強をおろそかにしないようにしなさい!!」

私はだまって聞いていた、というより腹が立って、胸がつまったのか声になって出てこない。だって、父はあんまりひどいことを言うと思う。私達二人が不良の男女でもあるかのようないい方をして、きたならしい行動をしているように言うからだ。母も母だ。私は前から、八木君を家によぶことを話していたし、私の前では、ぜひつれていらっしゃい、と言っておきながら、なんのかんのといっても、最後は父の考え方に従って子供を裏切ってしまうんだから、きらいだ。私は八木君と友達になって、勉強することにファイトが出るし、とても良いと思っている。私は少しも悪いとは思わない。でも親の注意だから、と思って下を向いて聞いていた。父はのんきなくせにこういう事については、やかましいのである。

こんなことを書いてしまったけど、あなたは読んでも気にしないでね、お願いよ。ただ、昨日、玄関の前で長く話をしていたでしょ、あれがいけなかったと思うの、これからはなるべく昼間のうちにお話しをしてしまいま

しょう。勝手なことばかり書いてごめんなさい。ほんとうに気にしないで下さいね。父はただ冗談の口調で言ったのだから……。私は今、こんなこと書いてしまって後悔しています。あなたが考えこんでしまうと困るから。でも大丈夫ね。すぐ忘れてしまってね。

それから今日のオムライスとてもおいしかった。どうもごちそうさまでした。

一月十六日（金）　曇り後晴　　虹子

今日のHRの時、やっと楽しみにしていたプレイング・ルームをやった。期待していたのに、ゲームは一部の男子が勝手なことして協力しない、こんなことではとてもうるさくて、気がちって気持が一つになれない。せっかく玉井先生がはりきってくださったのに気の毒だと思う。

バスケットの練習は三十分位で終ってしまったので、帰りに久しぶりでみんなと坂の下の「味一番」に入ってお好み焼きを食べた。ベチャベチャ話してとても楽しかった。家に帰ったら、六時半頃だった。おばあちゃんが「今日はずい分遅いね。八木さんと遊んできたのかい」ですって。失礼しちゃうわ。

一月十七日（土）　晴　　啓介

僕は今日、学校で日記を読んだ。がっくりきちゃった。すぐ感情的になって考えてしまう。だって、別に二人とも悪いことなどしていないつもりだもの。僕だって虹子さんと交際してから、いつでも、どんな時にもファイトが出てくるんだ。よく僕も母に、「勉強もおろそかにしないように」と注意を受けるよ。そんな時、僕はすぐ、反抗的になって口答えをしてしまう。あたりまえだ。だって、「夢中になってはいけない」と言うことと同じだ。そんな考え方は古いんだ。虹子さんの言う日中に話し合った方がいい、という方が正しいよ。

僕は考えた。今の僕達の年頃というのはむずかしいもんだ。学生だからもちろんその本分を忘れてはいけないんだ。そのために父母が注意してくれるんだ。やはりすなおに受け取るべきだ。僕も虹子さんの書いたのを何度も読んだが、少しずつ頭と気持と両方でわかってきた。

でもなあ……。ほんとにがっかりしちゃった。本当に。僕達の年頃って、どうして大人が水をさすのかな。二人が楽しく、そっと平和に気持よく過ごそうとしているのに、どうして、そっとしておいてくれないんだろ

う。僕が父親だったら、もっと子供の気持になって、友達のようにいっしょに考えてやるんだがな。どうして子供の気持をわかろうとしないで、すぐ変なことへ気を回わすのか……。

男女の交際は、どうしたらうまくいくのか。先生は、誰でも自由につき合う方がいいというけれど、それは、浅い友情だと思う。二人がなんでも話し合って助け合って、かたい友情で結ばれることがいいと僕は思う……。でも、あんまり考えるとなんにも出来ない。だから、もう考えないことにした。虹子さんも今度からおこごとを言われないように、ちゃんとやることをやって、それから遊ぶことにしようね。

今日、席の発表があったね。僕は君の隣だ。虹子さんはどう思いますか。僕は別に何とも思わないんだ。だって、思ったらおかしくなっちゃうもん。

練習は実に寒かった。風邪気味だったので鼻水が出て困った。四時ちょっと過ぎに帰ったので、久しぶりに夕飯に間に合い親孝行をした。

言いたいこと並べちゃって、ごめんね。虹子さんはあまり気にしないかな。

今度から日記の交換期日は、月、水、金ときめよう。

それから最後に注意をすることがあるよ。なんて、大げさだけれど、練習が終ったら、まっすぐ帰った方がいい。そんなこと言える僕じゃないが（でもたまにはいいが）、程よくやりなさい。僕もこれからどこにもよらず家に帰ることにした。両親に信用を得るためにもまた、自分のためにもね。君も僕に注意があったら、かまわず書いてね、たのむよ。

一月十八日（日）　晴　　啓介

一日は平凡にすぎた。練習も休みなので、十時半までねてしまった。その点、男は得だね（すみません）。

この間の映画のことで、眠っていたと言うけど、大事なことは頭の中に焼きついているんだよ。「私の可愛い人」という中の二人は、本当にお互いが信じ合っているのかな。もし信じ合っていたら、あんな不幸なことにはならなかったのではないかと思う。人間の心って微妙なものだ。もし、あれが僕達だったらどうだろう？　いや僕たちだったらあんなことにはならない。やはり疑われるような事やウソなどはお互いにつくものではない。そんなことをすれば必ずお互いに信じ合えなくなって、ヒビが入るんだね。それには強い精神が二人に必要だ。普

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo